パワーポイント教材「多文化共生ってなんだろう？」をご使用される講師の皆様へ

本教材「多文化共生ってなんだろう？」は、地域における多文化共生について理解を深めることを目的としたものです。それぞれに問題提起されたケーススタディを通して、外国人住民との共生を考えられるようになっております。

教材は以下で構成されています。

◆参加型ワークショップ用パワーポイント

◆参加型ワークショップ用ワークシート

◆参加型ワークショップで扱っているケーススタディの冊子（本編）と、九州での在住外国人のデータや多文化共生の事例を取り上げた同冊子別冊（データブック）。

講師の皆さまは、これらを自由にアレンジしてお使いいただけます。

ケーススタディでは、５つの事例（外国人の目線での事例４つ、日本人の目線での事例１つ）を取り上げています。各ケーススタディで取り上げている中心問題は以下の通りです。

ケーススタディ No.	主人公の設定	中心問題
1	ベトナム出身 技能実習生	・日本語および日本での生活様式（生活ルール）について、外国人住民が学習する機会がないこと ・そのことが原因で、生活に支障が出ていること ・外国人住民にわかる形での情報提供がされていないこと ・地域住民が外国人住民との共存について理解が浅いこと
2	ネパール出身 留学生	・日本語がわからないために情報が得られないこと ・被災や防災教育の経験が無いために災害時に適切な行動がとれないこと ・近隣の日本人住民と助け合うことができないこと ・避難所での配慮が不十分であること
3	インドネシア出身 小学生	・宗教が理由による日本での生活様式のちがいについて ・宗教への配慮について ・当事者がそのことについて悩みを感じていること
4	ブラジル出身 日系人	・日本語が流暢な外国人でも、難しい日本語や漢字を理解することは困難であること ・日本と出身国とでは、就労についての考え方が違うこと ・日本の社会システムについて学ぶ機会がなく、そのことで外国人材・外国人住民が日本での生活において不利益を被る可能性があること
5	日本人 主婦	・外国人が日本の地域コミュニティのルールについて、母国の慣習から十分に理解していない場合があること ・外国人住民が地域ルールに反した行動をとっている時や外国人住民に理解してもらえない時に、日本人住民がその結果だけを見て問題だと思ってしまっていること ＊自治会そのものの問題について議論を行いがちになるので、そこにフォーカスしないように多文化共生の視点で考えるよう促す必要がある。

学習対象者・学習内容にあわせ、上記を参考に参加型ワークショップで使用されるケーススタディを選択ください（例：小・中学校であれば３、外国人住民との防災について学習を行うようであれば２、など）。
ただし、多文化共生についての学習は、これら教材を用いて全てを完結することはできません。継続した学習の中の一コマとして、本教材をご活用ください。その際に、学習の段階に合わせ、ご自由にアレンジしていただいて結構です。

【参加型ワークショップの流れ（例）】
◆導入（多文化共生のイメージを全体で共有する）
◆学習目的に合わせたケーススタディ（前頁ケーススタディ No.1~4 の内）１つのグループワーク→発表（共有）
◆日本人住民のケーススタディのグループワーク→発表（共有）
◆２つの事例を振り返る（特に、日本人の事例を用いることで、自分ごととして考えるように振り返る）
◆多文化共生についての事例を紹介
◆まとめ（講義終了時に、多文化共生について自分の意見を持てるようになる）
＊学習対象者・学習目的によって、教材のアレンジは自由です。スライドの順番の変更や不足情報等を追加しても問題ありません。
＊必要に応じ、パワーポイントの非表示部分をご利用ください。非表示部分は主に在留資格や九州での在住外国人のデータ、また各県の多文化共生に対する取り組み例などが入っております。まとめの前に入れると効果的です。
＊グループワークの所要時間や参加者数、発表の方法などで所要時間は異なります。上記の例では６０分～９０分を想定しています。

【参加者が“自分ごと”として捉えるために】
参加者自身にとって、自分の生活圏内にある身近な「外国人住民との接点」を明確にしてあげる必要があります。その為、講義・授業の前には講師自身がそれを把握しておくことが重要です。
「〇〇町にあるコンビニの店員さん、どこの国の人か知ってる？」
「いつも通学中にすれ違う自転車に乗った外国人の方々はどこに行っているのかな？」
など、取り上げられるエピソードをたくさん集め、参加者へ問いかけを行なってください。地域によって在住外国人の集住状況は異なりますが、可能な範囲で「多文化共生はすでに自分の身の回りにあるのではないか」と言う“気づき”を提供することが望ましいです。取り上げる個所は冒頭でもまとめでも構いません。